

第1回富山県文化審議会 議事概要

- 1 日 時 令和7年12月16日（火）10時30分～12時7分
- 2 会 場 富山県民会館 611会議室
- 3 出席者 委員13名（全員出席）
- 4 次第
 - (1) 開会
 - (2) 新田知事 挨拶
 - (3) 委員紹介
 - (4) 会長等の選出
 - 富山県文化審議会規則第2条第2項の規定により長澤委員が会長に選出された。
 - 富山県文化審議会規則第2条第4項の規定により、島添委員が職務代理人に指名された。
 - (5) 諒問「新たな富山県民文化計画の策定について」
 - 新田知事から長澤会長に新たな富山県民文化計画の策定について諮問文が手交された。
 - (6) 議事
 - 新たな富山県民文化計画の策定について
事務局から資料に基づき、現行の富山県民文化計画の進捗状況や、本県の文化芸術を取り巻く課題と今後の方向性、新たな富山県民文化計画の策定についての考え方、検討事項について説明した。
 - 委員からの主な意見
別紙のとおり。
 - (7) 閉会

第1回富山県文化審議会 委員からの主な意見

(委員は五十音順)

委員名	発言内容
青柳委員	<ul style="list-style-type: none"> 富山を離れてみて、富山にはすごいものがあったのだ、と気づかされた。（食文化、自然など） 県外の人々（京都の教室の生徒など）を富山に呼び、展覧会への参加を促している。 富山県の文化に対する取組みは大変熱心で、他にここまで取り組んでいるところはないと言っている。
伊東委員	<ul style="list-style-type: none"> 文化芸術はそれ単独ではなく、ふるさと教育や産業文化など、相互に関連しているもの。 富山の文化力を高め、付加価値をつけるため、10年後の姿を考え、イメージすることは重要である。 優れた、本物の文化に触れる機会は重要である。一方、東京等中央の文化を紹介するだけでは、県外への人口流出を招きかねない点もある。 富山がもつ全国区の芸術文化の価値をさらに高め、広めるべき。（ガラス造形、金工、漆芸、木彫工芸、民謡、能楽、民芸、国際交流、演劇、舞踊など） 年齢や性別、障害と言った境界のない形で誰もが芸術に触れる機会を増やすべき。
内山委員	<ul style="list-style-type: none"> 「文化」というネーミング自体が高尚な感じのイメージがあり、おそらくアンケートで文化に親しんでいますかと聞くと「親しんでいない」と回答されるのでは。 生活の中の文化や、アニメ、祭り、コスプレなど、より広範なものも文化だという前提を入れないと、文化芸術に親しんでいると考えるのは難しいのでは。 今、色々なイベントが開催されていて、高志の国文学館などのイベントは大変好評だと聞いている。 イベントが無いというアンケート結果は、PRの仕方が違った方向にいっているからではないか。高齢の方には紙、新聞が大事だと思うが、子育て世代への情報発信は、SNSやYouTubeの活用が大事。 文化に触れる、親しむ人を増やすには、本当に小さなうちから文化、アートに触れることが大事。 子どもが泣くと迷惑をかけるから、と静かな環境には連れていけないと思われる。 幼少期に文化、アートに触れずに育った子どもたちは、美術館とかに行こうと思わなくなる。 子育て世代が参加しやすいよう、赤ちゃんが泣いても良い音楽会や、座ったり寝転んだりして楽しめるアート体験の場を設けてほしい。 子どもは沢山絵を書く。アートは大好きなので、年代や場所の境界をなくし、展示会やホールでなくとも、県民会館の受付のような場所でも良いので、色々な場所に多様なアートがあるという、富山はアートが素晴らしいと言ってもらえるような場所にしてほしい。 物価高であり、無料でできるイベントがあればいい。
清原委員	<ul style="list-style-type: none"> 学校コンサートや親子コンサートは子どもたちに音楽に興味を持ってもらうきっかけづくりとなっており、さらに本格的な公演を鑑賞する機会への支援等、この分野の拡充をお願いしたい。 アーツカウンシルの取組みの情報収集をしているが、文化芸術への支援だけでなく、地域活性化やインクルーシブに資する事業など有意義な取組みが各地で拡がっている。
佐部利委員	<ul style="list-style-type: none"> 文化、アートの醍醐味は人との双方向的な交流にある。 富山から世界へ、また世界から富山へアーティストを招くことで、交流の機会を創出すべき。 子どもに対する機会の創出、出張ワークショップやコンサートはあるが、保育園から小学校、中学校あたりで頻繁に美術館に行く機会が少ないようだ。 鑑賞のやり方の工夫が必要。美術館で鑑賞後に対話をすることで、ウェルビーイングの向上に繋がる。 アーティスト滞在型のイベントを行い、空き家や空き店舗、郷土芸能、伝統文化と組み合わせることで地域活性化を図ってはどうか。 人の交流は文化の交流であり、違うものが交流することが多様性であり、面白いもの。 铸造とガラス、アーティストと伝統芸能など異分野の組み合わせなど考えられると良いのでは。 来館者数だけではつかれないものもある。アートとデザインというのはすごく良いコンセプトだと思うが、デザインには色々な捉え方があり、そこを考えることでより特徴的な展覧会ができるのでは。 計画を柔軟に変更していくことも大事ではないか。

第1回富山県文化審議会 委員からの主な意見

(委員は五十音順)

委員名	発言内容
三 宮 委 員	<ul style="list-style-type: none"> ・省内に自信をもって紹介できる文化について、「少しある」と回答した人の割合が高く、広く捉えると88%の人が魅力があると考えているのは凄いと思った。 ・こどもたちが文化に親しむことが大事だと考える人が大半だというのも、富山県民の意識の高さだと感じた。 ・文化芸術を「体験させてもらう」「享受する」だけでなく、県民が自ら深めたいと思えるかどうかが大切になってくるのでは。 ・自発的、積極的に文化芸術に親しんでいけるように変化させることを考えながら計画を作っていくと良いのでは。 ・実際に自分でやってみる、作ってみて発表する機会が沢山あるというのは凄く良いこと。 ・自発的に文化活動を盛り上げよう、享受していこう、文化活動に参加していこうという雰囲気があると県外から来た人にも良い印象を受けるのではないか。
島 添 委 員	<ul style="list-style-type: none"> ・無形民俗文化財の調査に携わっている立場から、日頃から考えていることを述べたい。 ・少子高齢化で社会が縮小していく中において、拡大志向では立ち行かない。限られた人的資源を奪い合うのではなく、共存を。 ・数値目標に関して、来館者数が増えれば文化が充実したという評価は一見分かりやすいが、文化の成熟は量で測れるほど単純なものではない。もし、数値目標を立てなければならぬというのであれば、質を測るような評価方法を考えるべき。 ・文化は歴史的にみれば、創造と衰退・消滅の繰り返しである。これを前提とすれば、今あるものをすべて残していくべきと考えるのは無理がある。 ・そう考えると、県民によって文化が自由に創造されたり、消滅されたりするごく自然な動向をサポートするのが行政の役割なのかもしれない。
砂 原 委 員	<ul style="list-style-type: none"> ・旅行の形態が団体から個人へとシフトしている中、文化施設への交通アクセスは重要。利用者の目線に立って施設へのアクセスに留意してほしい。 ・美術館等の来館者数を季節ごとに見ると冬季は少ないのではないか。観光でも冬季の誘客が課題である。秋は全国各地でいろいろな企画展が開催され競争になるので、魅力ある企画展を冬期に実施してはどうか。 ・児童生徒に文化芸術の魅力を、例えば音楽で言えばクラシックに限らず幅広く理解してもらうことは有意義であると思う。他方、県内で開催されるクラシックの演奏会に若い人の姿がさほど多く見受けられないのはもったいないと感じている。 ・将来の文化の担い手である県内の中高生が伝統文化にどれだけ触れているか、アンケート調査を実施して把握してはどうか。
武 内 委 員	<ul style="list-style-type: none"> ・「文化」の捉え方や解釈には年齢や立場による違いがあり、所謂「経済人」は大上段に構えすぎている傾向がある。 ・協賛、スポンサーをしても実際に観ていない人、活動に関わっていない人が多い。 ・知らないだけで、知れば、その活動が自分たちの生活、或いは身近にあるものだということを感じていただける。 ・「富山には何もない」というのは、「高度な当たり前の文化」を持っていることに他ならない。 ・「何もない」をあまりネガティブに捉えず、非常に高度な当たり前を持っている、素晴らしいことだと捉えた方が良いのでは。 ・アンケートの部分、あまり文化というものを大上段に構えず、身近なものとして捉えた時に県民がどう思ってるのかと本音の部分を聞いた方がいいのでは。 ・文化は「都市のあり方」、まちづくりに直結するもの。まちづくりと一体で考える必要がある。 ・前橋市のビジョンに「めぶく。」と掲げられており心地の良いビジョン。 ・平田オリザ氏から、SCOT、利賀の取組みと比較しながら芸術文化観光専門職大学(兵庫県)の地域における文化芸術に対する取組みについて話を聞いた。来年視察に行く予定。 ・都市のあり方について、書籍『余韻都市』としてコンセプトが提示されており、その中で富山の事例も挙げられている。 ・芸術の鑑賞の仕方として、観て終わりではなく鑑賞した後に共有するとウェルビーイングが高まるという要素も含まれている。 ・人口当たりの文化施設数は富山は日本の中でもトップクラスであり、素地はある。 ・新たに構築するというより、どう再構築するか。都市のありたい姿をどのように実現をしていくかというところが重要。 ・経済同友会、経済人としても、都市のあり方についての論議、或いは実現に向けて、色々と一緒に取り組むべきではないかなと。

第1回富山県文化審議会 委員からの主な意見

(委員は五十音順)

委員名	発言内容
長澤委員	<ul style="list-style-type: none"> ・幅広い文化芸術にスポット当てていくため、1つ上位で、細かいところも議論をするような富山版アーツカウンシルを設置してはどうか。 ・「文化」の定義は難しく、芸術文化、産業文化、生活文化といった幅広い視点で捉える必要がある。 ・街中にアートを設置する際には、そのメンテナンスまで考慮した上で飾っていかなければいけない。 ・インクルーシブ、多様性を認めたりすることの原点とは「私たちは皆違う、でも皆特別だ」ということ。 ・人は文化を創造できない。文化とは時間がかかり、醸し出てくるようなもの。今から始めることは「文化になるかもしれないもの」を社会に装置化するところまでしかできない。 ・文化というのは廃れてもいくもので、未来永劫続けていかなければいけない重圧感の中でやって楽しい文化であるはずがない。 ・縦割りにしないとよくできないものもあるが、時代についていくために違う分野にも手を伸ばしてほしい。 ・過去に、社会的に切れ目のある12歳を褒めよう、祝おうという取組みを行い、その中で小学生向け広報誌を発行したところ東西の小学生による交流がはじまった。 ・文化を考えるということは、それぞれの立場で、違った相互理解が成り立っている集団の事を文化を共有する人間達と言う。方言や作法も文化なら、同じルールのもとで、やれているところには1つ小さな文化域ができる。信じ込んだら頭からちからちを超えよう、その先になんかあるよっていうことで、美大らしからぬ教育を今展開している。 ・今後の検討にあたっては、「価値合理性」(どういうものか)と「目的合理性」(何のためにやるか)の2つの視点を持ってほしい。 ・コンビビアリティ(宴会)という言葉が今復活してきている。VUCA(変動性・不確実性・複雑性・曖昧性)の時代においてアートがこれほど注目されるのは、これまでの効率優先だった考え方の問題点だったのではないか。 ・ウェルビーイングというのは効率と、わからないこともちやんとやらせてあげよう、というこの2つが抱き合させて存立している全体性のことを言う。 ・審議会開催時間の延長を。(1時間半から2時間に) ・アンケートの設問項目を再検討し、より広範な意見を引き出せるように。
西島委員	<ul style="list-style-type: none"> ・全国高等学校総合文化祭を取り巻く状況を見ても、文化の捉え方が多様化し、従来の分野にとらわれない表現活動への関心が高まりつつある。 ・郷土芸能に特色のある八尾高校や南砺平高校の活動を見て大変大きな感動を覚えた。 ・商業施設のロビーにおいて、南砺平高校の郷土芸能を鑑賞する機会があった。演目の鑑賞に加え、観客が実際に楽器に触れて体験できる活動も行われ、参加した子どもからは「楽しかった」「また見てみたい」といった感想が聞かれた。幼児期であっても、少しのきっかけがあれば文化体験が心に残り、将来の文化への関心に繋がるのではないか。 ・「こども」といっても幼児期から高校生まで幅広く、段階的に文化体験ができるような計画が必要。
丸山委員	<ul style="list-style-type: none"> ・富山県美術連合会に所属している多数の作家をもっと活用してほしい。 ・富山県美術館のTADギャラリーでは「3つのシンフォニー」という美術連合会所属の作家3名ずつ、年2回、約1月ずつ長い期間の展示をやってもらっている。 ・水墨美術館ではこのような機会が無く、話を聞くと展覧会の間の隙間では人が来ないとも聞いており、そういう時に所属作家が行って何かするとか、もっと県の美術館と関わりを持っていきたいと思っている。 ・県の呉東・呉西で美術家の気質に温度差があるように感じている。黒部より東では現代アートの凄い作家もおられる。その方々と美術連合会との接点が薄いと感じている。 ・県展でも従来の美術品的な作品が多く、最近になってたまに若い作家の現代アートのような作品を持ってこられると「おお」となる。 ・お互いに接点を持てれば、県内の若い作家が県展やアートフェスタに出品する機会が増えるのではないか。 ・現代アートの展覧会もあるが、県から助成をあまり受けていないなど、機会が恵まれていないという声も聞く。もう少し手厚くしてもらうと全体で県の美術界も、若い人も県展に出してもらえるのではないか。 ・富山県はガラスなどアートがある方だと思っている。 ・県内どこに行ってもアートがあるような環境づくりをしてもらえると、こどもたちがアートに刺激されてアートを目指す、という環境になるのではないか。

第1回富山県文化審議会 委員からの主な意見

(委員は五十音順)

委員名	発言内容
米 田 委 員	<ul style="list-style-type: none">・障害者芸術活動支援センターは法律に沿って県に設置されたもの。最初の基本理念に「障害の有無にかかわらず文化芸術を鑑賞、参加、創造することができるよう障害者による文化芸術活動を幅広く促進していく」ということが掲げられている。・障害者の芸術が目に触れる機会が少なかった時代から、富山県では越中アートフェスタや県美術館でのビエンナーレトヤマなどで既に自然な形で、質の高い障害のある人の作品というものをつくり上げる土壤があると思っている。これが後押しとなってセンターの活動が充実している。・越中アートフェスタは全国的に見ても稀有で長く続く「富山の宝」だと思っている。・障害者による文化芸術活動を幅広く推進、促進の部分が、少し感覚が変わっている。・障害者が積極的に関わってくるということではなく、むしろ環境とか、そういう場づくりを整えていくことで、自然に県民の皆さんが障害の有る無し関わらず、高齢者や子どもも含めて、参加できるような環境というものが障害者の芸術活動推進の根底にあるテーマなのだと感じている。・10年後だと今よりも、AIは物凄く発達し、日本のアニメも凄いことになっているだろう。そして高齢者はどんどん増えているだろう。・見方を変えると、高齢者が増えることは障害者が増えるということ。障害のある方の芸術活動促進っていうのは高齢化に向けた1つの手だけの見方としても考えられると思っている。・アートをきっかけとした出会い、繋がりや交流の広がり、数値化できない人の充足感や充実感が芸術活動の後押しとなっていて、支援に繋がっている。・各地で障害者アートは盛り上がりを見せており、これまでにないジャンルの組み合わせを試している。・富山県は観光、歴史、伝統など潜在的な素材が豊富にある。これらを組み合わせて新しい視点や価値観を生み出していけば良いと思う。・文化芸術が地域社会の豊かさのバロメーターとなると考えている。・今年度から富山県文化振興財団と連携協定を締結し、有機的に色々なジャンルを組み合わせて、色々な芸術活動を開催していく、と一步踏み出したところ。